

「魂の浄め」としての哲学

齊藤 安潔

1. はじめに

プラトン哲学の究極的な目標は万有の存在を根拠付ける原因である真実在、つまりイデアを認識することにある。そして、そのイデアがいかなるものなのか、そしてイデアを認識するためにはどのような手法を取らねばならないのかといった、プラトン哲学の中核を成すテーマが最初にはっきりと提示されたのが『パイドン』である。『パイドン』ではソクラテス刑死の当日を舞台として、魂の不死と魂同様に恒常不変の存在で真なる知の対象であるイデアについての議論が展開されており、ソクラテスその人をモデルとして哲学と哲学者の理想のあり方が示されている。また、『パイドン』はプラトンがシケリアを訪れた後に最初に書かれた作品であり、おそらくはその地でピュタゴラス派との交流があったことから、極めて神秘主義的な色彩が強い。そのことは哲学が秘儀になぞらえられていることから明らかで、哲学は魂の肉体からの「浄め

(κάθαρσις: purification)」だとされている。そして、魂の肉体からの分離は死に他ならないのだから、哲学は生きながらにして肉体を捨て去ろうとする「死の練習」だということにもなる。そこでは完全な実在であるイデアを理性によって知られるものとする一方で、感覚によって知られる物体を完全さにおいて劣るものとみなし、感覚ではなく理性による探求をしなければならないということが示されている。

こうした主張自体はこれ以降のプラトン哲学の方向性を示すものとしてよく知られているが、その実この「浄め」が一体何を意味しているのかはそれほど明瞭ではないように思われる。なぜなら、当然のことながら人間は生きている限り肉体を伴っており、またそうである以上、感覚を通してしか何物をも知ることはできないはずだからである。それゆえ、この主張は「死の練習」とい

う言葉が示すように、生きながらにして死なねばならないという逆説的なものであり、それが何を意味するのか、またどのようにして可能であるのかといったことが議論の対象となってきた。そこで、本論では *κάθαρσις* という面から『パイドン』で示された哲学のあり方がどのようなものであり、そしてそれがその後のプラトンの哲学にどのような影響を与えたのかを考察する。というのも、プラトンは『パイドン』で *κάθαρσις* およびそれと関連する *καθαρός* (pure, clear) などの類語を頻繁に用いており、哲学を浄めになぞらえたことも含め、そこには明確な意図があると思われるからである。以下においてはまず *κάθαρσις* および *καθαρός* といった語が『パイドン』でどのように用いられているかを検討し、その上でプラトンがいかなる意図をもって哲学を *κάθαρσις* になぞらえたのかを明らかにしたい。

2. 宗教的文脈における *κάθαρσις*

『パイドン』⁽¹⁾では *κάθαρσις* およびその類語は 28 箇所⁽²⁾で用いられており、『国家』のような長い作品でも同程度 (26 箇所) であることを考えるとその使用回数はかなり多いと言っていいただろう⁽³⁾。では、これらの語はどのような文脈において、どのような含意のもとに用いられているのだろうか。

まず一つ目は、宗教的儀礼に言及する文脈において、汚れや罪からの浄めという意味で用いられるケースである。『パイドン』の冒頭ではソクラテスの死刑の執行が遅れた理由が全編通じての語り手であり、対話篇の題名にもなっているパイドンによって語られる (58b)。それはアテナイがデロス島へ使節を送っている間は国を清浄に保ち (*καθαρεύειν*)、誰一人として処刑してはならないからというものであり、ここでは当時の一般的な宗教的文脈における、血の汚れの忌避という意味で浄めが用いられている。儀礼の前に手や体を浄めることから始まり、何らかの罪が犯された際に罪の汚れを浄めることで共同体を正常な状態に戻すなど、当時の宗教儀礼において浄めは重要な役割を果たしていた。人でも動物でも物でも、俗の世界にあるものは浄められることで初めて神の領域に属する聖なるものとなる。その意味において、浄めという行為は本質

的に浄められたものとそうでないものを識別するという働きを持っていると言える⁽⁴⁾。

そうした浄めの機能は、秘儀宗教においては入信儀礼を受けたかどうかによって入信者とそれ以外の人々を区別するという役割を果たしている。『パイドン』にも浄めの儀式を受けることで死後に幸福を得ることができるという秘儀についての言及がある。

「これに対して、真実には、節制も正義も勇気も、これらすべての情念からのある種の浄化 (κάθαρσις) なのであり、知恵そのものはこの浄化を遂行するある種の秘儀 (καθαριμός) ではなからうか。そして、われわれに浄めの儀式 (κάθαρσις) を定めてくれたかの人々も、恐らくは、つまらぬ人々ではないようだ。実際、彼らは大昔から謎めいた言い方でこう言っているらしい。秘儀も受けず、浄められもせずに

(ἀμίητος καὶ ἀτέλεστος) ハデスの国に到る者は、泥の中に横たわるだろう。これに対して、すっかり浄められ秘儀を成就して

(κεκαθαρισμένος τε καὶ τετελεσμένος) からかの地に到る者は神々と共に住むだろう。実際、秘儀に携わる人々が言うように、『ディオニュソスの杖を持つ人々が多いが、バックスの徒は少ない』からだ。僕の考えでは、バックスの徒とは他でもない正しく哲学した人々のことである」(69c-d)

ここで用いられている「秘儀も受けず、浄められもせずに

(ἀμίητος καὶ ἀτέλεστος)」という言葉は、エレウシスの秘儀の入信者が μύστης または τελεστής と呼ばれていたことと対応している。また、秘儀を受けなかった者が罰として死後に泥の中に横たわるという主張は『国家』でも語られており (363d)、そこではその主張は秘儀の授けてとして知られていたオルペウスやムサイオスの徒のものとされている。通常、古代ギリシアにおける宗教とは家族、地区、国家といった社会組織によって執り行われるポリスの宗教であり、個人は自らの属する集団の義務としてそれに参加し、そこに個人の選択の自由というものはほぼなかった。これに対して、秘儀宗教は入信するか否かは完全に個人の選択の問題であり、それゆえに入信者個人の死後の幸福を特別に

確約することができたのである。また、ホメロスの『オデュッセイア』（第11歌）において語られているように、死後人間の魂は冥界で力なき影のような存在に成り果ててしまうというのが古代ギリシアの伝統的な考え方であったが、秘儀宗教はそれに対して死後にこそ人間は幸福な存在でありうるのだという考えを示した。プラトンは当時一般的になりつつあったそうした考えに、魂こそが真なる自己であり、死後に渡って力を持ち続けるという主張を重ね合わせて提示していると思われる。

ところで、伝統的宗教にせよ秘儀宗教にせよ、浄めは血の汚れや罪の汚れのように、何らかの汚れからの浄めである。では、『パイドン』における「哲学的な浄め」は一体何からの浄めなのであろうか。それは次の箇所が示すように、肉体からの浄めに他ならない。

「そして、われわれが生きている限りでは、思うに、こんな風にすれば、われわれは知ることのもっとも近くに到達するだろう。つまり、どうしても避けられない場合を除いては、できるだけ肉体と交わず共有もせず、肉体の本性に汚染されずに、肉体から清浄な状態になって (μηδὲ ἀναπιμπλώμεθα τῆς τούτου φύσεως, ἀλλὰ καθαρεύομεν ἀπ' αὐτοῦ)、神ご自身がわれわれを解放する時を待つのである。そして、こういう風に、肉体の狂乱から離れ去って清浄な者となれば (καθαροὶ ἀπαλλατόμενοι τῆς τοῦ σώματος ἀφροσύνης)、当然のこととして、われわれは清浄な人々の仲間になるだろう。そして、われわれ自身によって、すべての純粹なるものを、言い換えれば、恐らくは、真実なるものを知るだろう。なぜなら、清浄でない者が清浄なものに触れることは (μὴ καθαρῶ γὰρ καθαρῷ ἐφάπτεσθαι)、神の許さないことであらうから」(67a-b)

ここでは肉体は魂に悪しき影響を及ぼすもの、避けるべきものであり、知の獲得のためにはできる限り肉体から魂を浄めねばならないということが明確に語られている。この「肉体からの浄め」は『パイドン』の至るところで言及さ

れており、魂の優位と肉体の劣位という対比関係を、対話篇全体を通じて強く読者に印象付ける役割を果たしている⁽⁵⁾。

ここで述べられている知の獲得に際しての肉体のもたらす悪影響は、次の三点にまとめることができる。

1. 肉体は生きていく上で、さまざまな面で世話を要求する。(66b-c)
2. 魂が肉体的な感覚を通じて事物を考察する時、感覚の不正確さと、感覚が捉える対象の不確かなあり方により魂が混乱させられる。(79c)
3. 肉体は魂に強烈な快苦の感覚をもたらすことにより、そうした感覚を生じさせるものが真なるものだと魂に勘違いさせる。(83d)

肉体を伴って生きている人間は、さまざまな肉体的欲求にさらされる。人間は自らの肉体を保持するため、食事や睡眠は言うに及ばず、衣服や住居など多くのものに気を配らなければならない。そして、そうした肉体に対する世話は快楽と苦痛を通じて行われる。たとえば、空腹だったり喉が渇いたりしているような時には、肉体は激しい苦痛を訴え、できるだけ早くそれを取り除くようにと要求する。そして、食事によって苦痛が取り除かれたならば、肉体は快楽を生じ、魂にそれがよいことだということを教え込もうとする⁽⁶⁾。そのように快楽と苦痛によって魂が馴らされてそれらを判断基準とするようになると、魂は闇雲に快楽を求めたり苦痛を避けたりするようになってしまい、結果としてより大きな苦痛に苦しめられたり、悪い判断をしてしまったりする。たとえば、暴飲暴食によって体調を崩したり、怪我することを恐れて戦いから逃亡したりなどである。さらに、肉体的な感覚は不確かであり、さらにその感覚の対象となる物体もまた不確かであるため、肉体を通じて考えることに慣れてしまった魂は常に混乱の只中に置かれることになる。

生きている限り人間は自らの肉体の世話から逃れることはできない。しかし、なぜ人間はそうした世話に過剰にかかずらうことになってしまうのだろうか。ここにはいわゆるアクラシアー、つまり無抑制の問題が含まれている。人間には「わかっているけどできない」ということがしばしばある。上であげた暴飲暴食や恐怖による逃亡の例などがそれである。初期のプラトンは徳を知とみ

なし、徳について理解することが正しく行為することにつながるはずだという主知主義的な立場を取っているが、アクラシアはその方針にとって大きな問題であり、後に『国家』において魂の三部分説という形で魂における調和の問題として捉えられることになる。しかし、『パイドン』では魂と肉体との対比から、肉体こそが魂を誤った判断に導く原因だと考えられており、いかにして肉体の影響を排除するかという点に議論の主眼が置かれている。そして、魂から肉体の影響を排除することは感覚を用いずに魂のみ、つまりは思考のみによって哲学的探求をするということにほかならない。καθαρός-κάθαρσιςのもう一つの用法はその点と関連している。

3. アイデアと思考の純粹さにおける καθαρός

καθαρόςには浄らかであるという意味の他に、純粹である、明瞭であるといった意味があるが、これは『パイドン』においてはアイデアに言及する際にも頻繁に用いられている。アイデア、形相 (εἶδος) は真なる実在、つまりは常に不変のあり方を保つ不滅の存在であり、存在するものを根拠づける究極の原因である。『パイドン』においてはそうした実在が存在すること、そして物質的な対象ではなく真実在を探求の対象として求めねばならないことが繰り返し語られている。

「魂が自分自身だけで考察する時には、魂は、かなたの世界へと、すなわち、純粹で (τὸ καθαρὸν)、永遠で、不死で、同じように有るものの方へと赴くのである」(79d)

「(浄められなかった魂は) 神的なもの、純粹なもの、単一の形相を持つものとの交わり (τοῦ θεοῦ τε καὶ καθαρῶ καὶ μονοειδοῦς συνουσίας) には決して与らないものとなるのである」(89d)

このようにアイデアやそれに類するものについて καθαρός が用いられている場合には、存在の純粹さ、完全さを表すものとして用いられている。原因としてのアイデアが常に同一のあり方を保つということは、若きソクラテスが拒絶したとされる自然学的説明のように、ある事物について相互に対立し矛盾するような複数の原因が同時に成り立つことはないということである⁽⁷⁾。アイデアは事物そのものであり、また事物をそのもの足らしめる唯一の原因であるから、決してある事物について複数の原因が同時に成り立ち、論理的に矛盾することはない。したがって、καθαρός とはそのものが単一であり、その内に相互に矛盾するものを抱えていない状態であることを示す語として用いられていると考えられる⁽⁸⁾。

さらに、『パイドン』では魂の不死証明において、魂とアイデアが親近だということに基づく証明がなされている⁽⁹⁾。すなわち、魂はアイデア同様、不可視であり、単一であり、不変である。肉体から浄められ、それ自身となった魂は感覚を用いずに純粹に理性のみによって思考できる魂であり、それはアイデアと同じく自らの内に矛盾するものを持たないという点で καθαρός な状態にある。そして、魂がそうしたあり方を保つ場合にのみ、真なる知識、つまりはアイデアを知ることが可能となるのである。

「それでは、このこと（思考によって物事の本質を知ること）をもっとも純粹（καθαρότητα）に成し遂げる人は、以下に述べるような人ではなかろうか。その人は、できるだけ思惟そのものによってそれぞれのものに向かい、思惟する働きの中に視覚を付け加えることもなく、他のいかなる感覚を引きずり込んで思考と一緒にすることもなく、純粹な思惟それ自体のみを用いて（αὐτῇ καθ' αὐτήν εἰλικρινεῖ τῇ διανοίᾳ χρώμενος）⁽¹⁰⁾、存在するものそれぞれについて純粹なそのもの自体

（αὐτο καθ' αὐτὸ εἰλικρινεῖς）のみを追究しようと努力する人である。その人は、できるだけ目や耳やいわば全肉体から解放されている人である。なぜなら、肉体は魂を惑わし、魂が肉体と交われば、肉体は魂が真理と知恵を獲得することを許さない、と考えるからである。シミアス、もし

もだれか真実在に到達する人があれば、それはこの人ではないか」
(65e-66a)

「もしもわれわれがそもそも何かを純粹に (καθαρώς) 知ろうとするならば、肉体から離れて、魂そのものによって事柄そのものを見なければならぬ」 (66d)

このように、魂が純粹にそれ自体である καθαρός な状態とは自らの内に矛盾を孕まない状態であり、哲学は魂をそのような状態にする「浄め」なのだと考えられる。それでは、実際のところいかにしてそれが可能になるのだろうか。

4. 魂の浄めとしての哲学

プラトンにおける哲学の方法ということでもまず考えられるのは、ソクラテスの問答法、ἐλεγχος である。歴史上のソクラテスを比較的忠実に描いていると思われる初期の対話篇から明らかなように、ソクラテスは自分から知識を開陳することはなかった。というのも、彼は自らを知者ではないと主張するのが常だったからである。代わりに、神から与えられた使命としてソクラテスは何かを知っていると主張する人と対話し、その知識が真正のものであるかどうかを確かめようとした⁽¹¹⁾。そして、彼と対話した人は例外なく自らの主張が矛盾したものであることを認めざるを得ない状況に追い込まれ、いわゆるアポリアへと陥ってしまう。しかし、ソクラテスによれば、それによってこそ人間が知らないことを知っていると思ひこむという恐るべき無知を免れることができるのである。相手から矛盾を取り払い、真なる知の探求へ向かわせるという ἐλεγχος のこうした特徴は、『パイドン』で示されている哲学による浄めとも重なるところが多いように思われる。人間が肉体を通じて何事かを考察しようとする、その度ごとに異なった現れ方をする個別的な対象へと引きずり込まれ、魂は混乱してしまう。さらに、肉体の引き起こす強烈な快楽や苦痛によって、魂はあらゆる悪のうちで最大で究極の悪、つまりは肉体的な感覚こそが真実であるという偽りに縛り付けられることになる。哲学はそうした魂に対して感覚

を通じた考察は偽りに満ちていることを示し、ただ魂のみを用いるように仕向けるとされている（82d-83e）。ἐλεγχος においても、対話相手が「敬虔とは誰であれ罪を犯した者を訴えることである」とか「男には男の、女には女の、それぞれに応じた徳がある」というように個別的な事例を主張するのに対して、ソクラテスはそのものが「何であるか」という唯一の原因を答えるように求める⁽¹²⁾。この場合、「ありかつあらぬ」ものである個別的な事例に拘泥する対話相手は肉体的な感覚を通じた考察のレベルに留まっているが、ソクラテスは徹底してそこに含まれる矛盾を明らかにすることで、対話相手をそこから解放しようとしているのだと考えることができる。

このように、『パイドン』において哲学が魂の浄めなのだとと言われる時、ソクラテスの ἐλεγχος が念頭に置かれているのは間違いないと思われる⁽¹³⁾。しかし、『パイドン』で提示されている哲学のあり方はそれに尽きるものではない。初期対話篇から明らかのように、ἐλεγχος は相手の主張の矛盾を明らかにするものではあるが、何か積極的な主張をするものではない。というのも、ἐλεγχος においてソクラテス自身は何も知らずただ相手の主張を吟味するだけという態度を貫くからである。これはおそらく歴史上のソクラテスの立場と合致するものだが、『パイドン』のソクラテスはそこから逸脱し、相手の主張を吟味するだけに留まらず積極的に魂の不死について自説を展開しているように見える。そして、『パイドン』においては ἐλεγχος を超え出るような哲学の方法として、仮設（ὑπόθεσις）を用いる考察が提示されている⁽¹⁴⁾。ὑπόθεσις は文字通りには「下に置く」という意味の語であり、ここでは議論の出発点、前提として定められた主張を意味する。魂の不死を証明する議論の最後を飾るイデア論を用いた証明の前に、ソクラテスは自分が若い頃に自然学の研究に傾倒したが、結局はそのやり方を捨ててロゴスの内で考察をする独自の手法を見出したことを語っている。

「それぞれの場合に、僕がもっとも強力であると判断するロゴスを前提として立てた上で、このロゴスと調和すると思われるものを真と定め、調和しないと思われるものを真ではないと定めるのだ」（100a）

ここでソクラテスが前提として立てている主張は、あらゆる事物の唯一の原因としてアイデアが存在するということである。この主張から出発して魂の不死の最終証明がなされることになるわけだが、ソクラテス自身が「他の時にも、これまでの議論においても、常に止むことなく語り続けてきた」(100b) というように、『パイドン』の議論全体を通じてアイデアの存在は前提されている。それゆえ、この『パイドン』という著作全体が仮設を用いた考察という新しい手法を用いた哲学の実例を示しているということもできるだろう。

この仮設を用いた考察は仮設を出発点とする点で相手の主張を出発点とする *ἐλεγχος* とは異なっているものの、やはり議論における整合性を問題としている点は同じである。したがって、*ἐλεγχος* と同様、仮設を用いた考察における議論における矛盾や混乱は魂から取り除かれることになる。さらに、この手法はロゴスの内で考察を行うものであり、視覚やその他の感覚は用いないとされている (99e)。仮設を用いた議論において問題となるのは前提として立てられた主張とそこから導出される帰結との整合性であって、そこに肉体的感覚の入り込む余地はない。つまり肉体を用いない、純粋な魂のみによる考察だということになる。この仮設を用いた考察こそが真に知識を求める者が携わるべき哲学の条件を満たすものなのである。

また、ソクラテスの *ἐλεγχος* において問題とされていたのは議論における整合性だけではないということも忘れてはならない。ソクラテスは常に善く生きるということを追求めた人であり、それゆえに人々を捕まえては徳とは何かについて議論をし、善美のことがらについての無知を対話相手に自覚させていたのであった⁽¹⁵⁾。したがって、ソクラテスの *ἐλεγχος* とは「魂の配慮」なのであり、倫理的含意を含むものとして理解されねばならない。そして、『パイドン』における仮設を用いた考察においても、やはり哲学（つまり知恵の追求）は善く生きるために行われるのであって、*ἐλεγχος* の持っていた倫理的含意は失われていない。仮設を用いた考察について述べる直前の箇所、ソクラテスは機械論的に事物の原因を説明しようとするアナクサゴラスの議論に落胆したという経験を語っている (98b-99c)。ソクラテスは人間の行為についてはそのような機械論的な説明では本当の原因を明らかにすることはできず、善こそが万

物の原因なのであり、善についての判断こそが自分が死刑判決を受け入れて今ここに留まっている理由なのだ」と主張する。仮説を用いた考察とは、そうした原因を求めるためのものに他ならない。したがって、『パイドン』において提示されている哲学の目指すところはやはり善であり、それは行為との関連において理解されているのである。

それでは、首尾よく哲学による魂の浄めを成し遂げ、本当にまったく肉体から解放された人——つまりは死んだ人——は死後に一体どのような運命をたどるのだろうか。『パイドン』では、真実に哲学をした者は正しい人、善く生きた人として死後に神々の間に仲間として受け入れられ、幸福を享受するということが繰り返し語られる（81a, 82c, 114b-c）。このように、死後に神々と共に幸福を享受するという考えは人間の魂が持つ神性に基づくものであり、秘儀宗教に由来するものだと考えられる。秘儀宗教は秘儀によって神々と特別な関係を持つことにより、死後に幸福を享受することを目指す。たとえば、オルペウス教においては人間はゼウスの息子にして後継者であるディオニュソスを殺し、その身を食らったティタンたちがゼウスの雷電によって焼き尽くされた煤から生じたとされている⁽¹⁶⁾。それゆえ、そもそも人間は神々に由来するものとして誕生したが、その内にはディオニュソスに由来する神的な部分と、ティタンに由来する邪悪な部分とが混在している。だからこそ、人はオルペウスの教えに従って自らを浄めることで、死後に神々に受け入れられるよう努めねばならない。人間の内にある善悪の二重性と、浄めによるその純化というこの構造は『パイドン』で示されている哲学のあり方と同一であり、プラトン自身がそれを強く意識していたことは、「バックスの徒とは他でもない正しく哲学した人々のことである」（69d）と明確に語られていることから明らかである。

5. 不可知論への挑戦

以上のように、『パイドン』においては καθαρός-κάθαρσις という語は汚れからの浄めという意味で宗教的文脈において用いられていると同時に、哲学的文脈においては認識や存在の純粹さという意味で用いられており、それらは最終

的には魂の浄めとしての哲学において重なり合うのである。つまり、κάθαρσιςとは肉体からの浄めであり、それは知の獲得に際して肉体という障害を取り除くために必要となる。それゆえ、知を求める者は哲学、すなわち感覚ではなく仮説を用いた考察をしなければならない。そのようにして自らの魂を矛盾した思考を持たない純粋な状態、善を正しく認識できるような状態に保つことができれば、その魂は死後に自らと同じく不可視で純粋で不変な存在であるアイデアを觀照して真に知恵を得ることができるだろうし、また神々の仲間として受け入れられるだろうということである。

すでに見たように、この魂の浄めとしての哲学はソクラテスのἐλεγχοςを踏まえた上で提示された、新たな哲学の手法である。そして、それはソクラテスの哲学、特にソクラテスが堅持した不可知論を乗り越えようとするものであったと考えられる。『ソクラテスの弁明』でソクラテス自身が語るように、ソクラテス自身には深い無知の自覚があった。そして、ἐλεγχοςにより多くの人の無知を明らかにする中で、彼は人間の知恵というものは神の知恵に比べれば無価値であるという考えに行き着いたのである⁽¹⁷⁾。そこには、人間の能力の限界についての認識を人間に可能な知とみなし、そこに留まることをよしとする態度がある。このソクラテスの考えが正しいならば、人間は決して善についての十全な知を得ることはできないということになる。

しかし、ここには一つの抜け道がある。確かに生きた人間は知を得ることはできないかもしれないが、死んだ人間ならば可能かもしれないということである。

「もしも肉体と共にあれば何ごとをも純粋に知ることができないとすれば、次の二つのうちのどちらかであるからだ。すなわち、知を獲得することはいかにしても不可能であるか、それとも、可能であるとすれば死者にとってのみである」(66e)

もちろん、論理的には生きている間も、死んだ後でも、結局人間は知を得ることはできないという可能性もある。しかし、プラトンは死後に知を得る可能性を探ることを選んだのである。ソクラテスやプラトンが生きた時代は個人の死

後の運命への関心が高まりつつあった時代であり、そうした関心に応じてさまざまな秘儀が執り行われるようになっていた⁽¹⁸⁾。そして、ソクラテス自身が死後に魂が辿る運命について何かしらの確信を持っていたことはないにしても、そうした教説を知っていたことは間違いない⁽¹⁹⁾。少なくとも、ソクラテスの主張した真なる自己としての魂への配慮という考えは、そうした潮流と無関係ではないと思われる。プラトンもまたソクラテスから魂への配慮という考えを受け継ぐと同時に、さまざまな秘儀宗教の教義に触れていたはずである。そして、シチリアを訪れその地でピュタゴラス主義の思想に直に触れたことにより、魂の不死を軸として新たな、自分自身の哲学を形成する構想を得たのであろう。

しかし、死後の幸福に期待をかけるということは、相対的に現世の生の価値が軽くなるということである。特に、死後の幸福を重視すればするほど、その傾向は強くなる。実際、オルペウス教やピュタゴラス主義においては、輪廻転生の輪から抜け出して永遠の幸福を得るために、さまざまな戒律に則って「淨らかな」生活をするのが求められた。それはすなわち死後の生を真実のものと見なすと同時に、今のこの生を偽りのもの、浄める必要がある汚れたものと見なすことに他ならない⁽²⁰⁾。『パイドン』においてもそうした現世軽視の事情は共通している。人間にとって生きているという状態は何か牢獄の中にいるようなものだというたとは、その最たるものである(62b)⁽²¹⁾。そして、純粹に魂のみとなった死後に知を得られる可能性がある一方で、魂と肉体が結合した状態にある現世においてはそれが不可能であるとすると、肉体にその原因を求めざるを得ない。そして、肉体のせいで知の獲得が妨げられるのならば、そこから魂を解き放つことが哲学(つまり知を求めること)だということになる。魂の不死と死後における知の獲得の可能性から、その妨げとなる肉体からの魂の浄めとしての哲学が帰結するのは必然であったと言えるだろう。

このように、プラトンが『パイドン』において καθαρός-κάθαρσις という語を用いて、哲学と秘儀宗教とを重ね合わせて示した背景には、ソクラテスの哲学を乗り越え、プラトン自身の哲学を形作ろうという試みがあったと考えられる。しかし、「ソクラテスの哲学を乗り越える」という言い方はあまりよくな

いかかもしれない。というのも、プラトン自身はそうした哲学の方向性がソクラテスの哲学を受け継いだものだと考えていただろうし、だからこそ彼は死を目前にしたソクラテスにそれを語らせたのである。しかし、想起説や仮説を用いた考察のように、生きている間に知を得ることはできないにしても、限りなくそれに近づくことができる可能性はすでに示されている。そして、それは後に『国家』においてより積極的な形で主張されることになる⁽²⁾。

だが、そのように不可知論が退き、また魂の三部分説のように非理性的な欲求や情念の原因が魂に組み込まれて肉体からの魂の浄めという主張がなされなくなったとしても、議論の枠組自体が失われたわけではない。感覚的事物を超越した知の対象であり、善の原因である真実在の存在と、理性的思考によるそれへの接近はプラトンにとって主要なテーマであり続けた。その方向性を最初に明確に打ち出したものとして、「魂の浄めとしての哲学」はプラトン哲学のその後を決定づける重要な転回点だと言うことができる。

参考文献

- Bostock, David, 'The soul and Immortality in Plato's Phaedo', *Plato 2*, ed. by Gail Fine, Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Burkert, Walter, *Greek Religion*, trans. John Raffan, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1985(1977).
- Dorter, Kenneth, 'Equality, Recollection, and Purification', *Phronesis*, vol. 17, No. 3, pp. 198-218, 1972.
- Graf, Fritz and Sarah Iles Johnston, *Ritual Texts for the Afterlife*, New York: Routledge, 2007.
- McPherran, M. L., *The Religion of Socrates*, Pennsylvania State University, 1996.
- Miller, Patrick Lee, *Becoming God*, London: Continuum, 2011.

脚注

- (1) 原文テキストは John Burnet, *Platonis Opera*, vol. 1, Oxford Classical Texts を参照した。翻訳は岩田靖夫訳（岩波文庫、1998）を参考にしたが、一部変更した箇所もある。
- (2) 各語の使用箇所は以下の通り。なお、語の意味は LSJ による。
καθαρός (clean, pure, clear) : 65e, 66d, 66e, 67a, 67b, 68b, 79d, 80d, 80e, 81d, 82c, 83d, 83e, 108c, 109b, 109d, 110c, 110e, 111d, 114c

καθαρεύειν (to be clean or pure) : 58b, 67a
κάθαρσις (purification) : 67c, 69c
καθαρισμός (purification, purificatory rite) : 69c, 82d
καθαίρειν (cleanse, purify) : 69c, 114c

- (3) なお『法律』では 60 箇所 で用いられており、これもかなり多い。ただし、『法律』は国制についての細かい議論が大部分を占めているため、これらの語がすべて哲学的な議論の文脈で用いられているわけではない。
- (4) Burkert, pp. 75-77.
- (5) 67c 「浄化 (κάθαρσις) とは魂を肉体からできるだけ切り離すこと」、80e 「魂が純粋な姿で (καθαρόν) 肉体から離れたとしよう。その場合、魂は肉体的な要素を少しも引きずっていない」、81c 「これに話して、思うに、魂が汚れたまま浄められずに (μεμιασμένη καὶ ἀκάθαρτος) 肉体から解放される場合がある」
- (6) 『パイドン』冒頭では苦痛と快楽は一つに結び付いているということが語られている。(60b-c)
- (7) 96e-97b では 2 が成立する原因として、1 が 1 に加算されることと、1 が 2 に分割されることというまったく逆の原因が成り立ってしまうという例が挙げられている。
- (8) Miller, pp. 87-88.
- (9) 「魂という、この目に見えないもの、自分と同じように高貴で、純粋で (καθαρόν)、目に見えない場所へ行くもの」(80d6)
- (10) ここで用いられている εἰκλινής という語は unmixed, pure という意味であり、ここでは感覚が混ざっていないことを強調するために用いられていると考えられる。この語は 67a でも καθαρός と織り交ぜて用いられており、実質的には同義語として扱われていると考えてよいように思われる。
- (11) 『ソクラテスの弁明』 22b-23b.
- (12) 『エウテュブロン』 4c-5e, 『メノン』 71e-72c.
- (13) ἔλεγχος が魂の浄めであるという主張は、『ソピステス』(230b-e) においても見られる。ただし、そこでは κάθαρσις は宗教的なものというよりは、医者が患者の体内から害のあるものを瀉出する処方との比喻から理解されている。
- (14) 仮設を用いた探求自体は幾何学の証明法に範を得たものとして『メノン』においてもすでに試みられているが (86e)、そこでは『パイドン』と異なり明確にイデアと結びつけられてはいない。
- (15) 『ソクラテスの弁明』 38a.
- (16) Fritz Graf, pp-66-67.
- (17) 『ソクラテスの弁明』 23a-b.

- (18) 『国家』の冒頭において、ケパロスは人間は老年に差し掛かると死後の運命について悩むようになると語る (330d-e)。また、アデイマントスはムサイオスとオルペウスの徒を称して儀式を執り行って死後の幸福を保証するような連中がいることを述べている (364e-365a)。
- (19) 『ソクラテスの弁明』40c-41c。
- (20) トゥリオイ出土の黄金板には「私は重く苦しい輪から飛び出し」という一節が刻まれている (Berunabé, *OF488*, l. 5)。これは輪廻転生のサイクルを指していると考えられるが、それは明らかにマイナスのイメージを持っており、そこから抜け出すことが秘儀の目的であることがわかる。
- (21) ここで「牢獄」と訳した語はφρουράであり、肉体を指していると考えられる。肉体を魂を閉じ込める枷として理解する考えは、オルペウスの徒によるものとして『クラテュロス』で言及されているソーマ=セーマ説にも見取ることができる (400c)。なお、φρουράには牢獄以外にも監視という意味があり、その場合は「人間はある監視の中にあり、そこから逃げ出しはならない」ということになる。しかし、その場合でも「逃げる」という言葉が用いられていることから、人間にとってこの生が何かしらマイナスのイメージを持つものとして語られていることは変わらないと思われる。
- (22) 『国家』では線分の比喻においてὑπόθεσιςから帰結ではなく原理に向かって遡る魂の働き (νόησις) が語られている。(509d-511c)